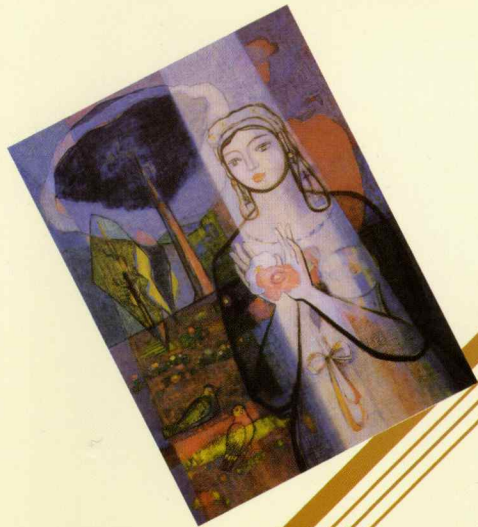
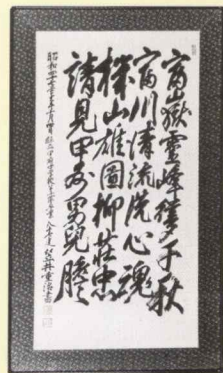




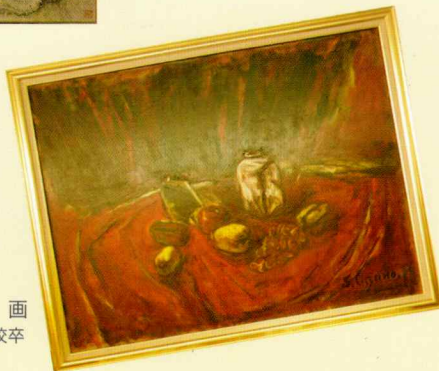
「育くみの間より 花と乙女」山川輝夫 画
油彩 1959(昭和34)年本校卒
1985(昭和60)年卒業生寄贈



「四神図」三枝茂雄 画
日本画 1937(昭和12)年本校卒
元本校教諭 国画会会員
1987(昭和62)年卒業生寄贈



「七絶書」笠井重治 筆
1903(明治36)年本校卒
元国会議員
日米文化振興会会長等を歴任
1982(昭和57)年卒業生が
卒業記念に額装して寄贈



「花梨のある処」数野繁夫 画
油絵 1959(昭和34)年本校卒
創立130周年記念寄贈



山梨県立甲府第一高等学校 創立 130 周年記念事業 甲府一高資料展示案内



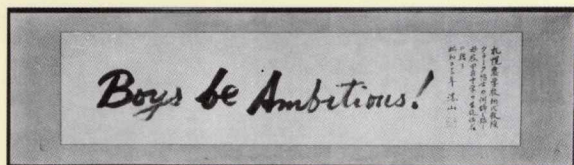
「猫 ひめらやん」望月定夫 画
日本画 卒業五十周年記念
1930(昭和5)年卒業生寄贈



「Be Gentleman」 昭和二十六年十二月 甲府第一高等学校のために
石橋湛山 筆
1902(明治35)年本校(甲府中学)卒



「トランプ」須藤 貌 画
日本画 1933(昭和8)年本校卒
元本校教諭
東京美術学校卒業制作コンクール一席作品



「Boys be Ambitious!」 札幌農学校初代教頭クラーク博士の訓辞を録し、
母校甲府中学の生徒諸君に贈る 昭和二十二年
石橋湛山 筆

130th
Anniversary

目的

創立130周年記念事業の一環として、未来を担う一高生の向学心や豊かな人間性、母校愛を育むことを目的に、諸先輩が築き上げた学校の歴史を伝え、同窓生・関係者の優れた業績等を顕彰し、各種資料の展示を行う。

視点

一高生が広く日本や世界に目を向けるように、高い志の涵養に資する人物及び業績に着目して選定した。特に、発揮された個性や創造性、時代に先駆けた意味などを出来るだけ明らかにすることに努めた。また、原則として、国内的・国際的に活躍した物故者とした。



大島正健 (おしま まさたけ)

1859(安政6)年-1938(昭和13)年
甲府中学第7代校長

神奈川県出身。奈良中学や甲府中学、宮崎中学などの校長を務め、キリスト教に基づく全人教育を施した。本校には1901(明治34)年、第7代校長として赴任し、13年間に在職し、後の首相、石橋湛山をして「幸いに大島校長にあうことにより、クラーク博士の話を聞き、なるほど真の教師とは、かくあるものかと感動した」と言わしめている。また、古代中国語に関する音韻学の権威者としても知られ、日本語に関しても優れた研究業績を残した。

札幌農学校の第1期生であり、クラーク博士の教育指導を直接受けた一人でもあった。1947(昭和22)年、中等国語教科書に「クラーク先生(大島正健筆)」が採用され、クラークの「Boys be Ambitious! (青年よ、大志をいだけ)」との言葉を後世に残す上で大きな役割を果たした。「紳士は規則に縛られるのではなく、自己の良心に従って行動するものである」とのクラーク精神を甲府一高の校是とも言うべき、「Be Gentleman」につなげ、自由と責任の問題を個人の主体性に帰した意味で今も大きな影響を及ぼしている。



石橋湛山 (いしばし たんざん)

1884(明治17)年-1973(昭和48)年
甲府中学1902(明治35)年卒 第13回

東京都出身。

日本の偉大なジャーナリストであり、政治家である。戦前は、朝鮮における独立運動に理解を示したり、帝国主義に対抗する平和的な加工貿易立国論を唱えるなど、軍国主義が台頭する中であってもしりべたる言論人として押し通した。戦後は、政治家としても活躍し、大蔵大臣などを歴任後、1956(昭和31)年、第55代内閣総理大臣に就任したが、病のため二ヶ月で辞任を余儀なくされる。「政治的良心に従う」との潔い弁は、多くの人に感動をもたらした。その後も国際平和活動に尽力するが、特に日中友好に貢献した。

広い見地に基づく健全なジャーナリスト精神の発揚は驚嘆に値し、『石橋湛山評論集』や『湛山回想』、半藤一利著、『戦う石橋湛山』などの諸本を通して、今もその精神を広く学ぶことができる。なお、本校と後輩への思いは一際強く、大島校長を介してクラーク精神を学び得たことを生涯にわたる心の財産としていた。



江口俊博 (えぐち としひろ)

1873(明治6)年-1946(昭和21)年
甲府中学第10代校長

熊本県出身。広島の中海中学や長野中学の校長を経て、本校には1923(大正12)年、第10代校長として赴任し、9年間に在職した。

校長としての本校における功績は大きく、1924(大正13)年、誰にでもできる「歩けるだけ歩く」という生徒提案を採用し、体力と精神力の調和に役立つとの思いから、行事として開始されたのが今日に続く「強行遠足」である。また、日新鐘(1926(大正15)年製造)の命名を初め、今日の校是につながる「苟日新、日日新、又日新(まことに日に新た、日に新た、また日に新たなり…日々の向上に努めてほしいとの願いが託されている)」と、「賛天地之化育(天地の化育をたすくべし…自然の教化力を信じ、その手助けとなる人間の善性の伸長を期待している)」は共に江口校長の発案による。

1928(昭和3)年、現在地に移転し、新校舎も建設されて、新たな50年に踏み出そうとしたが、今にいたる甲府一高の基礎の確立に果たした江口校長の役割は実に偉大であった。



中村星湖 (なかも りうこ)

1884(明治17)年-1974(昭和49)年
甲府中学1903(明治36)年卒 第14回

南都留郡河口村(旧河口湖町、現在の富士河口湖町)出身。

小説の執筆や翻訳活動、評論活動などでスケールの大きな文学者として活躍した。

甲府中学時代から校友会雑誌などへ文章や漢詩を投稿し、文学への関心を強めていったが、1907(明治40)年、「早稲田文学」懸賞長編小説の一等となった『少年行』で、現実をあるがままに写し取ろうとする自然主義の有力な新人作家とみなされた。この小説は、二人の少年の出会いと成長、別離を軸に、当時の甲府中学の様子もうかがえるなど、青年前期を描いた名作である。その後、フローベール、モーパッサン、ゾラなどの小説の翻訳にも努め、フランス文学の先駆的な紹介者としても貢献した。特にフローベールの『ボヴァリー夫人』は「我が国の最近に行はれた自然主義運動の本道を明かに」するとのねらいで、五年間かけて、1916(大正5)年に訳出された労作である。

その後は農民文学や民衆芸術の論客として活躍し、郷土文化の振興にも大いに努めた。



早川徳次 (はやかわ のりかず)

1881(明治14)年-1942(昭和17)年
甲府中学1900(明治33)年卒 第11回

東八代郡御代味村(旧一宮町、現在の笛吹市)出身。

大正・昭和期の実業家で、1920(大正9)年、東京地下鉄道株式会社を創設するなど日本に地下鉄を紹介・導入し、「日本の地下鉄の父」と呼ばれる。

初めは理解されなかったが、軟弱な地層であっても下の固い地層に建設すれば問題がないことや、豆を使った交通量調査などを行い、事業として成立することを説くなど優れた合理的思考の持ち主であり、地下鉄の必要性にいち早く着目した先見性には驚かされる。

1927(昭和2)年、日本で最初の地下鉄が上野から浅草間で開通したが、路線延長で資金繰りが苦しい時でも、安全を第一に考え、全鋼・難燃化車輦や自動列車停止装置の導入、将来の輸送量増加を予測した設備投資などを積極的に推進した功績は大きい。また、駅とデパートを直接出入りできるようにするなど営業面でも優れた手腕を発揮した。

実業家として創造性や先見性に富み、常に粘り強く取り組んだ偉大な先輩である。



笠井重治 (かさい じゅうじ)

1886(明治19)年-1985(昭和60)年
甲府中学1903(明治36)年卒 第14回

南巨摩郡西島村(旧中富町、現在の身延町)出身。

大正・昭和期の代表的な日米親善活動家であり、政治家である。

甲府中学卒業後、17歳の若さで渡米し、シアトルのハイスクールやシカゴ大学などで学んだ。語学の才能に恵まれていただけでなく、弁論の技量にも優れ、シカゴ大学卒業時には、太平洋沿岸の排日運動に対して米国民の正義心に訴える演説で最高雄弁賞を得ている。1918(大正7)年帰国後も、日米・日英関係の改善のために貢献した。また、1937(昭和12)年、衆議院議員に当選後、列国議会同盟会議に議員団員として参列し代表演説を行なっている。1941(昭和16)年、日米関係が一段と悪化する中で、戦争回避のために、米全国各地を訪れて講演や交渉を行っている。戦後も、マッカーサー元帥や占領軍幹部らに善政を要望したり、日米文化振興会を創立したりするなど、日米親善や国際親善のために尽力した。

日本の国際人としての優れた先駆者であり、国際理解教育の上で誇れる大先輩である。



内藤多仲 (ないとう たちゅう)

1886(明治19)年－1970(昭和45)年
甲府中学1904(明治37)年卒 第15回

中巨摩郡榑村(旧榑形町、現在の南アルプス市)出身。大正・昭和期の建築構造学者として知られ、「耐震構造の父」と評される。

1917(大正6)年から翌年にかけて米国に留学した際、旅行用トランクの仕切板や船の構造から着想を得て、耐震壁による耐震構造理論を考え出した。この理論に基づいた鉄骨鉄筋コンクリートの建物が関東大震災でも無事だったことで内藤の理論が実証された。

戦後も、数多くの建物設計を手がけたが、通天閣(二代目)や東京タワー(1958(昭和33)年)など多数の鉄骨構造の電波塔・観光塔の設計も手がけ、「塔博士」とも呼ばれた。

「積み重ね、積み重ねてもまた、積みかさね」の言葉を信条として、能への造詣も深く、幅広い知識と教養、好奇心の持ち主であった。日本の誇る先駆的な耐震構造設計者として、あるいは、建築学の教育者として、工学関係で最も活躍した大先輩である。



三神吾朗 (みかみ ごろう)

1889(明治22)年－1958(昭和33)年
甲府中学1908(明治41)年卒 第19回

中巨摩郡大鎌田村(現在の甲府市)出身。
米国のプロ野球チームでプレーした日本初のプロ野球選手としてその存在が知られる。

甲府中学卒業後、早稲田大学野球部に入り、1913(大正2)年には、米国ノックス・カレッジへ留学し、野球部生活を送った。「この日本人選手こそは、わが大学チームの命であって彼が走塁を始めたなら誰もアウトにすることができない」と校史に記録されたほどの活躍を示し、1915(大正4)年にはキャプテンまで務めた。その前年1914(大正3)年の夏休みには、有色人種を含めて編成される独立巡業プロチーム「オール・ネイションズ」に外野手、遊撃手等で参加している。その後、イリノイ大学に進学し、経済学を専攻することになる。

帰国後、商社に就職し、野球との関係を絶つことになるが、甲府一高野球部の大先輩であり、野球の草創期におけるパイオニアとしての役割は高く評価されてよい。



小林 中 (こばやし あたる)

1899(明治32)年－1981(昭和56)年
甲府中学1916(大正5)年卒 第27回

東八代郡石和村(旧石和町、現在の笛吹市)出身。
日本財界の重鎮と言われ、戦後の経済繁栄の基礎を築く上で貢献した。

若くして家業の石和銀行頭取に就くが、根津嘉一郎の知遇を得て、富国生命保険に入社し、1943(昭和18)年には社長となり、経済界に人脈を広げていった。戦後、1951(昭和26)年、時の首相、吉田茂から要請されて、初代日本開発銀行総裁に就任した。この時、開銀は政府機関だから、政党などから注文がきても私は一切引き受けないと明言し、大いに吉田の信頼を得たとの逸話が残っている。就任後は、基幹産業に直接融資するという方針を貫き、そのことで、自動車や重厚産業などの設備投資が活発になり、戦後復興に弾みをつけることとなった。その後、アラビア石油社長(1968(昭和43)年)、日本航空会長(1973(昭和48)年)をはじめ、数多くの役職に就任したり、経団連・日経連の常任理事を務めたりするなど、財界の世話役、相談役として尽力した。気骨のある財界人として幅広く活躍した大先輩である。



飯田蛇笏 (いいた だつこ)

1885(明治18)年－1962(昭和37)年
甲府中学1898(明治31)年入学

東八代郡五成村(旧境川村、現在の笛吹市)出身。
1898(明治31)年、甲府中学入学。
1903(明治36)年、京北中学に転入。

大正・昭和期の代表的な俳人で、近現代における俳句発展の貢献者の一人であり、郷里山梨県境川の地に根ざし、独自の孤高・重厚な作風で知られる。

上京中は高浜虚子に師事するが、1909(明治42)年に郷里境川に隠棲した。虚子の俳壇復帰とともに句作を再開し、「ホトギス派」の中心作家として活躍した。1917(大正6)年、愛知県で発行されていた俳誌『キララ』の主宰者となり、誌名を『キララ』から『雲母』に改め、1925(大正14)年に発行所を甲府市に移した。以後、『雲母』の結社は発展を遂げ、俳誌『ホトギス』のグループに次ぐ全国的な勢力を築くこととなった。

代表作、「芋の露連山影を正しうす」(1914(大正3)年作『山嵐集』所収)、「くろがねの秋の風鈴鳴りにけり」(1933(昭和8)年作『雲芝』所収)に見られるように、郷土の地で、山国の生活に根ざした、重厚で格調高い句は今も人々を惹きつけてやまない。



望月春江 (もちづき しゅんこう)

1893(明治26)年－1979(昭和54)年
甲府中学1913(大正2)年卒 第24回

西山梨郡住吉村(現在の甲府市)出身。
山梨を代表する日本画家として知られる。花鳥画を得意とし、後年、墨と金による独特の画風を確立していくが、古典の伝統に現代感覚を融合した格調高い作品を残している。

1938(昭和13)年、発表機関が少なかった日本画壇の現状を憂え、若手画家達の発表機関の提供を目的に、川崎小虎や穴山勝堂らと「日本画院」を創立した。以後、晩年まで日本画院に作品を発表し続けてその発展に努めた。また、日展審査員も務めるかたわら、東京女子高等師範学校の教授を務め教育にも尽力した。1958(昭和33)年、日展出品「蓮」で日本芸術院賞を受賞している。品位と優美を失わず新しい日本画を創造するために、自由な気風を尊重すべきとの思いが終始一貫しており、生き方の上からも有益な示唆を与えらる。

なお、甲府中学時代を回顧して、「私の絵心を励ましてくれる源は、何といってもあの温かい美しい同窓生の友情であった」との一文を記している。



功力金二郎 (くぬぎ きんじろう)

1903(明治36)年－1975(昭和50)年
甲府中学1921(大正10)年卒 第32回

北巨摩郡神山村(現在の韮崎市)出身。
近現代日本の代表的数学者の一人であり、抽象空間や位相空間の研究で知られる。

1928(昭和3)年、フランスに留学し、国家発行の博士号を取得した最初の日本人となった。1933(昭和8)年、岩波講座「数学」でテキストとしては日本で初めてとなる「抽象空間論」を執筆した。1939(昭和14)年、抽象空間の研究で、数学者では二人目となる日本学士院賞を受賞し、1949年(昭和24)年には、四十代の若さで学士院会員に選出されている。また、集積値集合に関する「功力ーブールリング(Beurling)の定理」も高名である。教育者としても北海道大学や大阪大学で数学科の発展に寄与したが、常に講義の準備は万全であり、「これで綺麗に証明できましたです」との決まり文句で終わる鮮やかな証明は学生に強い印象を残した。

かつて、数研出版の教科書の編者としても知られ、教科書を聞く度に誇らしさを覚えた大先輩であると同時に、その生涯は学問の厳しさと学ぶ喜びを伝えてくれるものであった。



野尻抱影 (のじり ほうえい)

1885(明治18)年－1977(昭和52)年
甲府中学1907(明治40)年赴任

神奈川県出身。1907(明治40)年、甲府中学に英語教師として赴任し、5年間在職した。

日本の英文学者、随筆家として知られるが、天文民俗学者としても活躍し、星の和名の収集研究で知られる。後年、書簡で「甲府の生活は小生の人生航路にとり(山と星を除外しても)有意義であった…」と語っているように、南アルプスに魅せられた甲府での教師生活は満ち足りたものであり、豊かな教養が織りなす授業は生徒を魅了した。

1918(大正7)年、教職を辞して出版社の編集業務に携わることになるが、「日本の民間には、星に関する伝説や名称に関し見るべきものがない」との定説に疑問を抱き、ラジオ出演を通して、全国に伝承された星の和名に関する情報提供を呼びかけるなどした結果、『日本の星』『日本星名辞典』等に集大成されることとなった。また、1930(昭和5)年、冥王星が発見されて、欧米では「Pluto」と命名されたが、野尻の提案で和名は「冥王星」となり、中国などでも共通に使用された。なお、時の大島校長から多大な薫陶を受けている。



木々高太郎 (きぎ たかたろう)

1897(明治30)年－1969(昭和44)年
甲府中学1915(大正4)年卒 第26回

西山梨郡山城村(現在の甲府市)出身。
小説家・推理作家であり、大脳生理学者としても知られる。

甲府中学時代は弁論部に所属し、校友会雑誌へも投稿する文学青年であったが、卒業後は医学の道を進み、1932(昭和7)年、当時のソ連の世界的な生理学者として知られる、イワン・パブロフの下で条件反射学を研究した。三十代後半に入ってから文壇に登場し、「推理小説」という言葉を初めて提唱した。大脳生理学を専門とする医者の視点が作品の底流にあり、従来、娯楽的な読み物にとどまっていた「探偵小説」を、知性と社会性を備えた人間を描く「文学」にまで高めることに努めた。

1937(昭和12)年、作品『人生の阿呆』で第4回直木賞を受賞した。また、「頭のよくなる本―大脳生理学的管理法」(1960(昭和35)年)など大脳生理学関係の啓蒙書も多数執筆している。



飯田龍太 (いいた りゅうた)

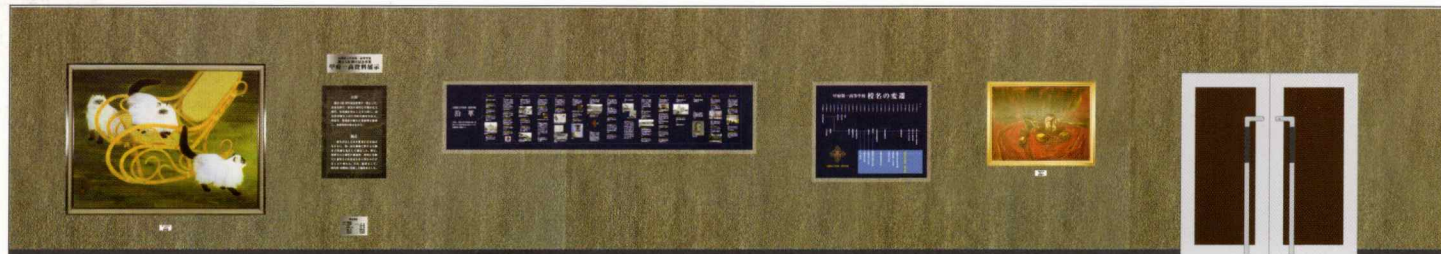
1920(大正9)年－2007(平成19)年
甲府中学1938(昭和13)年卒 第49回

東八代郡境川村(現在の笛吹市)出身。
戦後俳壇の代表的な一人で、父蛇笏と同じく郷里山梨県境川の地に根ざし、自然を素直に見つめ、五・七・五の定型と季語を重視する伝統派俳句の旗手として活躍した。

俳句を「才智よりもむしろ努力の部分が多い文芸」と捉え、初心の大切さを説き、自然を漠然と眺めるのではなく、しっかりと自分の目や耳で受けとめるためにも季語に即した作句を推奨した。1992(平成4)年、惜しまれる中で、蛇笏没後30年を期に、俳誌「雲母」を900号で終刊にしたが、蛇笏の跡を継ぎ、「雲母」の発展に尽くしたことは高く評価される。

1981(昭和56)年、日本芸術院賞恩賜賞を受賞している。また、随筆や評論の著書も多数ある。代表作、「雪の峰しづかに春ののほりゆく」(『童眸』1959(昭和34)年)、「どの子にも涼しく風の吹く日かな」(『忘音』1968(昭和43)年)、「かたつむり甲斐も信濃も雨のなか」(『山の本』1975(昭和50)年)などからは、季語を効果的に使い、自然を大きく素直に詠みこんだ龍太の句の妙味がよくうかがわれる。

視聴覚室 南廊下北面



目的・視点

沿 革

校名の変遷

視聴覚室内 南面



顕彰パネル

湛山の手紙

顕彰パネル

顕彰パネル

視聴覚室内 北面



顕彰パネル

顕彰パネル

視聴覚室 北廊下南面



強行遠足関連パネル

顕彰パネル



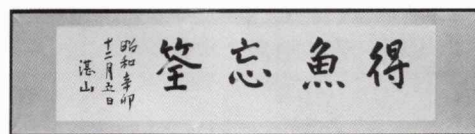
「紫いろにほのめく古都」米倉寿仁 画
アクリル画 1922(大正11)年本校卒業生
サロン・ド・ジュン会員
創立百周年記念美術展出品作
百周年を記念して寄贈



「原」佐野智子 画
油絵 元本校教諭 創元会
山梨美術協会会員 創元展出品作
創立百周年在職記念に寄贈



「快晴の鳳凰山」鈴木農夫男 画
油絵 元本校芸術科教諭
一水会 山梨美術協会会員
峡北美術協会会長



「得魚忘筌」 魚を得て筌を忘る 昭和辛卯(昭和26年)十二月五日

石橋湛山 筆